

石川県立美術館だより

平成15年6月1日発行 第236号



孝端皇后 鳳冠 明時代(2ページ「企画展示室(第7~9展示室)」参照)

日中平和友好条約締結25周年記念
石川県立美術館開館20周年記念

北京故宮博物院展

6月14日(土)~7月13日(日) 会期中無休

戦後工芸の展開(3)

石川の昭和40年代

5月29日(木)~7月13日(日) 会期中無休



萌黄釉裏金彩菖文鉢 竹田有恒 昭和48年(4ページ参照)

目次

北京故宮博物院展	2
甲冑と陣羽織(前田育徳会展示室)	3
近代の美術(前田育徳会展示室)	3
古九谷・再興九谷	4
戦後工芸の展開(3) 石川の昭和40年代 ...	4

常設展示 主な展示作品	5
美術館小史・余話(34)	5
夏休み親子で楽しむ美術館募集案内他	6
企画展TOPIC、六月の行事案内他	7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 ...	8

企画展示室(第7~9展示室)

日中平和友好条約締結25周年記念
石川県立美術館開館20周年記念

北京故宮博物院展

6月14日(土)~7月13日(日) 会期中無休

主催 / 北國新聞社・(財)石川県芸術文化協会

共催 / 石川県立美術館

特別協力 / 北京故宮博物院



粉彩 九桃図天球瓶 清時代

北京にある故宮博物院は、かつて紫禁城として明清両王朝が約五百年にも渡り宮廷生活を繰り広げた場所です。宮殿の内部には、歴代王朝より伝えられた遺品や、それぞれの王朝の栄華を象徴する至宝が、たくさん伝えられていました。紫禁城は清朝の終焉とともに、宮殿としてのその役目を終えますが、一九二五年十月十日、辛亥革命の記念日にあたるこの日、歴史博物館・故宮博物院として開館したのです。

故宮博物院は、二つの構想より設立されました。一つは伝承された宝物を鑑賞する場とすること。もう一つは紫禁城の宮廷生活の実態を公開することです。これはロシアのエルミタージュ美術館やフランスのルーブル美術館などと共通する背景です。

当初、その宝物は百七十七万点を数えたといわれています。「宋元明書画」「宋元明磁器」「清磁」「銅器」「玉器」「清画」「彫刻」「文具」「彫漆」「象牙」「織繡」などそれらは多岐に及び、専門の陳列室だけでも三十六の宮殿があてられました。

しかし、満州事変(一九三一年)に始まる一連の戦火を逃れるため、これらの宝物は北京より離れる決断が下されます。一九三三年、一万九千もの木箱に詰められた宝物は、北京から上海、上海から南京、更に四川省へと移動。いわゆる「南遷」が行われました。この空前の大事業の功績については、後世まで語り継がれています。やがて一九四五年、日中戦争が終結したことから、これらは順次重慶、南京へ戻されますが、今度は国共内戦のあおりを受け、一部が台湾へ渡りました。これらが現在、台北の故宮博物院の宝物として公開されているものです。

一九四九年、中華人民共和国が成立すると、残された宝物は順次北京へ戻ります。新政権の下、故宮博物院の整備が重要課題として進められたのです。わずか三十年ほどの国内混乱の中で、海外へ流出してしまつた宝物の回収をはじめ、発掘調査により発見された新たな遺物の収蔵、毛沢東など各界人士による文物の寄贈などにより、その拡充が進められ、一九八五年には

収蔵品は百五万件を数えるに至りました。本展は、北國新聞社創刊百周年記念、日中平和友好条約締結二十五周年を記念して、本館の開館二十周年にあわせて開催するものです。北京故宮博物院が収蔵する宝物より約百十件(百四十点)を紹介します。

【清王朝の栄華と清代宮廷芸術】

中国最後の王朝である清は、十七世紀初頭、中国東北部において満州族を統一した太祖ヌルハチが中国統一を図ったことに始まります。第三代世祖順治帝の一六四四年、北京を占領。この地を首都とすることを定め、以降二百六十年、その統治が続きます。特にその繁栄を極めたのが第四代聖祖康熙帝・第五代世宗雍正帝・第六代高宗乾隆帝の三代に渡る百二十年間です。ここでは歴代皇帝の肖像画をはじめ、甲冑・衣装など皇帝・皇后ゆかりの品々を紹介します。

【故宮に見る中国五千年の歴史】

故宮博物院の宝物は、紀元前より高度な文明を誇つた中国の歴史をも見事に物語ります。良渚文化(紀元前三十~二十五世紀 長江下流域)・龍山文化(紀元前二十五~二十世紀 黄河中下流域)など新石器時代の遺物から、商・西周・春秋戦国時代・漢へ続く古代王朝の遺品。そして広く東ローマから中近東・インド・日本・朝鮮との交渉を行い、中華世界を作り上げた唐時代の文物に至るまで、青銅器・玉器・陶磁器・金工品・漆工芸品を中心に紹介します。

【故宮が伝承した中国の名宝】

宋・元・明・清の時代には、優れた陶磁器や漆工品が数多く作られました。ここでは、それらを紹介します。北宋時代に頂点を極めた白磁の瓶子や、染付の美しい青花の大盤など、いずれも戦乱や流転という歴史を経て今日に伝えられた名宝です。



白磁 刻花文瓶 北宋時代



三彩 駱駝俑 唐時代



青銅 饗養文鼎 商時代

観覧料

一般	1,200円	個人
中・高生	800円	
小学生	600円	団体(20名以上)
一般	900円	
中・高生	500円	
小学生	300円	

当館友の会員は受付での会員証提示により、団体料金でご覧になれます。

常設展示室 前田育徳会展示室)

特集

甲冑と陣羽織

5月29日(木)~6月22日(日)

天正十一年(一五八三)、藩祖前田利家が金沢へ入城したその時期に合わせて、前田家歴代藩主所用の甲冑・陣羽織及び鞍・鎧などを展示します。

応仁の乱(一四六七~七七)以後、室町幕府の権威が衰え、戦闘が絶えない戦国時代となりました。この間の戦闘は、槍の普及さらには天文十二年(一五四三)の鉄砲伝来を契機として、密集隊形による徒歩集団戦へと変化し、機敏な動きをするためにより軽い甲冑が大量に求められ、また、攻撃員が多様化、強力化したのにもない、防具である甲冑の変化もつながり、より頑丈なものが求められました。

このような時代背景から、これまで作られてきた甲冑の様々な要素を組み合わせて、総合的に構成されたものが当世具足です。具足とは、装具の完備した甲冑という意味であり、大鎧、胴丸、腹巻などがそれだけで成り立っていたのに対して、当世具足は兜・面具・胴・袖と籠手・臍当・佩楯の七具などをすべて皆身している点が特徴です。

陣羽織とは、武士が合戦の時、具足の上に着用した外被です。室町時代中期頃より用いられ、具足羽織や陣胸服などと呼ばれました。形は一般に袖なしのものが多く広袖のものもあります。最初は普通の羽織を陣中で着用していましたが、次第に威厳を示すため人目を引く羽織が作られるようになりました。戦場において寒さや雨露から身を守るため、そして動き易さを求めて、また、存在誇示や応接の際に威厳を示すために、当時日本に舶載されたラシャやビロードなどの新しい素材を使用して、南蛮的嗜好が強く反映したデザインのものや、奇抜ともいえる自由な意匠による陣羽織が作られました。

江戸時代に入ると陣羽織も実用的なものから儀礼的な服装に変化し装飾的要素が強くなり、前田家歴代藩主の陣羽織も、華やかな色彩、大胆で奇抜な意匠のものが多くなりました。

前田育徳会の収蔵品は、歴代藩主が収集した美術工芸品をはじめ、書跡、文書・典籍類がよく知られています。その一方で、一九世紀から二十世紀はじめの西洋絵画や明治以降の日本画・油彩画にも佳品を見ることが出来ます。

前田家と西洋絵画は不思議なつながりのように思われますが、これらは明治四十三年に明治天皇・皇后が本郷邸に行幸された折、新築された西洋館の室内を飾るために揃えられたものを中心です。洋館の室内装飾を依頼された野口駿尾の薦めによるもので、富山県高岡出身の画商林忠正がフランス滞在中に収集した三百点あまりの中から選ばれたとされています。

折しも前田家第十六代当主利為は、文化に大変造詣が深く、こうした収集にも積極的でした。のちに自らも大使館付武官としてロンドンに駐在した昭和初期には、ヨーロッパ各地を巡り、アマン・ジャンなどと交遊しており、中には自身の目で買い求めたものも含まれています。

今回の展示作品の中では、ウジェーヌ・ブーダンの「洗濯婦図」が注目されます。いかにも小さな作品ですが、作者のブーダンは、印象派を代表する作家であるモネが「ブーダンの弟子モネ」と自ら語るように、近代西洋美術史において、大きな役割を果たしています。ブーダン自身の残した記録によると、彼は早くよりその絵の目指すところを、「青い空を輝かせること」と記しています。こうしたことから、印象派の先駆的な意識を持っていたことが知られます。いわゆる印象派の画家達は、アトリエよりも戸外での制作を好みました。モネをこうした意識へと導いたのが、ほかならぬブーダンでした。ひいてはその強い影響を受けた近代日本の洋画、日本画の発展にもまた、大きな影響を与えたと考えられるかと思われれます。

常設展示室 前田育徳会展示室)

特集

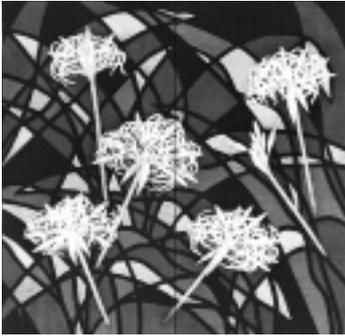
近代の美術

6月24日(火)~7月13日(日)

常設展示室 第5展示室)

特別陳列
戦後工芸の展開(3)
石川の昭和40年代

5月29日(木)~7月13日(日)



浜木綿 談議所栄二 昭和46年



金銀象嵌鶯鷺香炉 米沢弘安 昭和45年

- 主な出品予定作品
- 孔雀譜飾皿 二代浅蔵五十吉 小松市立博物館蔵
 - 天目釉「花容」 十代大樋長左衛門 大樋美術館蔵
 - 秋苑文飾箱 室瀬春二 東京国立近代美術館蔵
 - 集 三谷吾一 個人蔵
 - 浜木綿 談議所栄二 当館蔵
 - 訪問着「爽」 毎田仁郎 個人蔵
 - 烏 板坂辰治 個人蔵
 - 金銀象嵌鶯鷺香炉 米沢弘安 当館蔵
 - 太刀 銘 臨兵闘者云々 隅谷正峯 個人蔵
 - 樺造大盆 福田慶造 京都国立近代美術館蔵
 - 木彫加彩「春告魚」 下口宗美 個人蔵
 - 木彫截金彩色合子「千鳥」 西出大三 個人蔵

当館では平成十年に文化庁主催「日本のわざと美 重要無形文化財とそれを支える人々」を開催した折に、それに連動する形で、昭和二十年代における石川の工芸の状況を紹介する「戦後工芸の展開(1) 石川の昭和20年代」を開催し、好評を博しました。引き続き平成十二年には、昭和三十年代を概観する「戦後工芸の展開(2) 石川の昭和30年代」を開催しています。さて、今回はこのシリーズの三回目として、昭和四十年代の石川の工芸に焦点を当ててみます。この時期は高度経済成長のもと、各地で大型展覧会が開催され、人々の芸術への関心が、かつてない高まりを見せた時代ともいえます。それは工芸作家たちにも大きな刺激を与えることとなり、競って技術を磨きあい、時代の趣向に応える形で、個性豊かな作品が数多く発表されるようになってきました。この展覧会では、そうした状況下での石川在住及びゆかりの作家の動向を探ろうとするもので、この年代に顕著な活動を行った約四十二名の作家と、その代表作四十七点を紹介します。

江戸時代の初めに、加賀国江沼郡九谷村(現石川県江沼郡山中町字九谷吉イ)において、初めて焼成されたことから、この地で発展したやきものを九谷焼と総称しています。九谷焼は伝統工芸の盛んな石川県の、代表的な美術工芸品として全国的に知られており、創始期の古九谷から、時代あるいは窯の移りかわりによって、特色のあるさまざまな作品が伝わっています。古九谷は明暦元年頃から宝永七年頃(一六五五頃~一七一〇頃)、九谷焼の中でも最も早い時期に焼成された色絵磁器です。大胆な色遣いと巧みな意匠構成による作品の数々は、焼成後三〇〇年以上を経た現在でも尽きることのない魅力を放っています。昨年NHKの『新日曜美術館』で、その斬新なデザインが目目された「青手桜花散文平鉢」をはじめとする十七点(会期中、二点を展示替)が一度にご覧いただけます。古九谷窯の廃絶後、加賀地方では製陶が行われなかったのですが、京都の名工・青木木米を招いて、文化四年に金沢で開窯し、この地の窯業再興の先鞭をつけたのが春日山窯です。呉須赤絵写の軽妙な器が多く作られたものの、文政元年頃廃窯しましたが、それを惜しんだ加賀藩士武田秀平によって、繊細な赤絵細描を特色とする民山窯が同地で開窯しています。また文政二年に開窯した若杉窯は、藩の保護奨励もあって、能美・小松周辺での窯業隆盛の先駆けとなりました。この地では同じ文政二年開窯の小野窯、弘化四年に松屋菊三郎が主宰した蓮代寺窯のほか、白磁の優品を生んだ粟生屋源右衛門、華麗な色絵金襴手で知られた九谷庄三が活躍しました。古九谷開窯の地・江沼では文政七年に開窯した、独特な透明感の上絵が美しい吉田屋窯が知られています。が、赤絵の宮本屋窯、松山窯、京都から招聘した永楽和全の作品も、これに並び称される優品ばかりです。今日の九谷焼に受け継がれたもの、失われたものを含む、それぞれの窯の特色と変遷をご鑑賞下さい。



青手桜花散文平鉢 古九谷

常設展示室 第2展示室)

特集
古九谷・再興九谷

5月29日(木)~7月13日(日)

常設展示室

主な展示作品

5月29日(木)~7月13日(日)

● = 国宝
○ = 重要文化財
○ = 石川県指定文化財



牡丹 藤井観文

前田育徳会展示室

特集 甲冑と陣羽織
黒塗六十一間甲冑
五三桐文陣羽織
特集 近代の美術
洗濯婦図
深山の冬
六月二十三日(月)は展示替えのため閉室します
ブーダン
山元春舉
三代利常所用
四代光高所用

第1展示室

●色絵雄香炉
色絵雌雄香炉
野々村仁清
野々村仁清
野々村仁清

第2展示室

特集 古九谷・再興九谷
古九谷
色絵鳳凰図平鉢
青手樹木図平鉢
再興九谷

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

色絵図平鉢 吉田屋窯
干網 奥田憲三
熱叢夢 宮本三郎
催眠術80A 吉田富士夫
彫塑・造形 坂坦道
縛 田中昭
春葩 中村晋也
Miserere

第5展示室(工芸)

特別陳列 戦後工芸の展開(3)石川の40年代
4ページをご覧ください。

第6展示室(日本画)

大楠公・義貞公誠忠之図 久保田米傳
牡丹 藤井観文
富士巻狩図 村田丹陵
観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



春葩 田中昭



アコーディオン 南政善



色絵万年青図平鉢 吉田屋窯

美術館小史・余話

34

嶋崎 丞 当館館長

昭和五十年代に入り、すでに見てきたように新美術館の建設についての要望が県民各層からあり、県は一応建設に踏み切ろうということになったが、私共美術館の職員にとっては、そのことより昭和五十四年に迎える開館二十周年の歳に、どのような記念展を開催するかが重要な課題であった。

開館十周年記念展では、「琳派の芸術」として、当時の美術館界から大変高い評価を受けているだけに、少なくとも十周年記念展に負けず劣らずの内容にすべきたとの意見が多々あり、私共企画担当者にとっては大変なプレッシャーが襲いかかってきた。そこで誰がいうともなしに「源氏物語絵巻」の全巻公開ができないだろうかという意見が出された。言うは易しいが開館十周年記念展どころの騒ぎではない大変難しい展覧会である。そこで源氏物語絵巻を最も多く所有されておられる徳川美術館のご出品が無いと、この展覧会は開催不可能であるので、昭和五十三年の初夏東京目白の徳川黎明会に徳川美術館長をまずお訪ねし、ご出品公開についてお願いすることになった。



「国宝 源氏物語絵巻展」ポスター

徳川館長は開口一番に「大変難しい相談に来られたね」と話されたが、私は今まで開催してきた展覧会の実績などを含めて、今考えてみれば徳川館長がすべてご存じであるようなことを約一時間ほど滔々と述べて、まげてご出品をお願ひしたい旨を申し上げた。話し合うこと約三時間、「基本的には了解した」とのお返事をいただいたのが午後四時であった。丁度今頃の時節であったと思うが、黎明会を後にして気がついたら全身汗びっしょりであった。

旧館開館二十周年記念展開催について(1)

夏休み親子で楽しむ美術館

親子で鑑賞会

に参加しませんか

鑑賞を中心とした親子普及行事です

第1回彫刻を探ろう 小学校一・二年生
七月二十八日(月)

対象：美術に関心のある小学校一・二年生とその保護者(親子参加型なので必ず保護者同伴)

内容：ゲームなどを取り混ぜ、楽しみながら彫刻について知る

第2回古美術を探ろう 小学校三・四年
七月三十日(水)

対象：美術に関心のある小学校三・四年生とその保護者(親子参加型なので必ず保護者同伴)

内容：簡単なゲームを取り混ぜ、楽しみながら古美術を鑑賞する

第3回絵画を探ろう 小学校五・六年
八月一日(金)

対象：美術に関心のある小学校五・六年生とその保護者(親子参加型なので、必ず保護者同伴)

内容：作品をじっくり鑑賞し、理解を深める

場所：石川県立美術館
時間：午前10時～12時

定員：第1回は十組

第2回・第3回は十五組

参加費：無料

申し込み方法：往復はがきに参加希望の子供・保護者の氏名、年齢、住所、電話番号、希望する行事名を記入し、申し込んでください。

応募者多数の場合は抽選となります。(返信用はがきで通知いたします)

応募締め切り 六月三十日(月) 消印有効

企画展示室

第89回 光風会展 金沢展

六月六日(金)～十日(火)

(第77・9展示室)

光風会は、大正元年の創立で、数多い美術界にあって最も古く、豊かな歴史と伝統を持つ美術団体です。そのモットーは具象を基本にしながらも常に新しいリズムの追求に情熱を燃やし続けることです。今回の金沢展は今春東京都美術館で開催された中から基本作品九十七点と本県在住作家の作品四十一点、計百三十八点を展示いたします。

主な出品者

中央作家

庄司栄吉(芸術院会員) 清原啓一(芸術院会員)

岡部 昭(理事 工芸)

地元作家

円地信一 松本昇 三浦泉

入場料 一般七〇〇円(五〇〇円)

大高生四〇〇円(三〇〇円) 中小生無料

当館友の会会員は会員証提示で団体料金

連絡先 金沢市窪一 三二一

光風会石川連絡所 細川紘嗣

☎〇七六 二四一 一三七〇

貸出中の所蔵品

時絵雪月花図印籠

時絵佐野渡図雪輪形小箱

夕月軸盆

時絵管「極光」

光山作

浅野惣三郎作

小松芳光作

寺井宣次作

計四点

展覧会 能登空港開港直前記念展「空へ」

会期 五月十六日(金)～七月一日(火)

会場 石川県輪島漆芸美術館

彩釉鉢「交」

青手小禽文飾皿

深厚釉線文壺

大田健次郎作

北出不二雄作

三代徳田八十吉作

他二十点、計二十三点

展覧会 伝統と創造 九谷の今・作品展

会期 四月二十六日(土)～六月二十九日(日)

会場 石川県九谷焼美術館

(美術館の本)

石川県立美術館所蔵品図録

税込定価(円)三、五〇〇

前編(昭和400年利家がきた 桃山時代の美術)

二、五〇〇

石川県立美術館所蔵 九谷名品図録(改訂版)

二、〇〇〇

日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界

二、一〇〇

鳥と語る 詩魂の画家 脇田和展

二、一〇〇

最新刊

北野恒富展

二、〇〇〇

ミュージアムショップで販売中!!

郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。

☎〇七六 一三二一 七五八〇

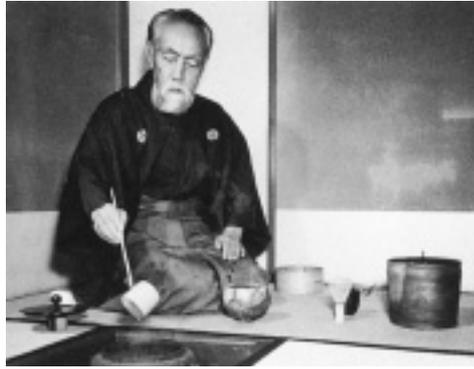
Q) 長い駐車場待ち

美術館の駐車場は狭いので、大きな展覧会の際などは、駐車のために長時間待たされることがよくあります。何とかならないものでしょうか。

A)

このことについては私たちも大変頭を痛めています。市の中心部にある当館は公共交通機関利用による来館を前提として昭和五十八年に建設されました。そのため十分な駐車場を確保していなかったのです。現在は来館者の利便を考慮して前庭を駐車場として使用しています。しかし、約六十台分のスペースしかなく、ご来館の皆様にはできるだけ公共交通機関のご利用をお願いしていますが、それでも約二割の方が遠隔地であるとか様々な事情により自家用車でのご来館のようです。大型企画展開催中は大変混雑しますが、隣接する歴史博物館及び本多蔵品館のご協力を得て、同館駐車場の一部を臨時に駐車場として利用させていただくなど、その混雑の解消に努めています。今後とも当館の運営に、ご理解とご協力をお願いいたします。

県美 Q&A



晩年の畠山即翁

企画展TOPIC

「畠山記念館名品展」その一
近代の数寄者 畠山即翁

創立者畠山一清（即翁）（明治十四年～昭和四十六年）は、能登国七尾の城主畠山氏を祖とし、金沢市長町に生まれ、東京帝国大学工科大学を卒業後、機械部門で修行し、大正九年荏原製作所を創立以来、世界的に有名なポンプメーカーとしての地位を不動のものとなりました。

この技術屋の畠山を茶の世界に誘ったのは、近代数寄者を代表する益田鈍翁といわれます。鈍翁は昭和十三年に九十三歳で亡くなりますが、その晩年に即翁は、短い期間ではありますが深いつきあいがあったようです。招かれた即翁に、鈍翁自らが光悦の名碗で茶を点てながら、自分の若い頃の事業家としての苦労話をして、ストライキに頭をいためていた即翁を慰めたそうです。そして最後に、「お茶をやる精神で仕事をやりたまえ。」と言われた言葉に、即翁は事業家としての決意を新たにするとともに、茶人即翁の誕生につながったと言われます。

こうして後に即翁は「近代最後の数寄者」の一人となるのです。即翁は自ら主催した茶会の記録を、「来客日記」（四冊）、また招かれた茶会の記録を、「茶会日記」（五冊）として残しています。これは単なる道具の羅列ではなく、挿絵や所感を織り交ぜた克明な記述であり、茶事

の意図や茶風を知る上で貴重です。また益田鈍翁・高橋常庵・五島古経楼・松永耳庵・小林逸翁など親交のあつた数多くの茶友が登場する点からも、近代茶道史上の重要な資料といっても過言ではありません。

また、約半世紀にわたり蒐集した古美術品は、「雅楽帖」（五冊）と題した自筆の蔵帳にまとめられています。蒐集品は二四〇〇点あまりにも上り、今日その主要なものは畠山記念館に継承され、我が国の伝統文化の興隆に寄与することを念願して、昭和三十九年十月に開館されました。即翁自らの設計監督による建築も茶道理念を貫き、現代建築に書院造りの趣を調和させた美術館は、都内とは思えない閑静幽寂な茶の湯にふさわしい佇まいです。（高嶋清栄 学芸専門員）

「開館20周年記念 畠山記念館名品展 茶道美術を中心に」
十月四日（土）～十一月三日（月・祝）

各地の展覧会

六月

- 開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。
- みんなで行こう美術館 音を感じてみよう 6/29まで
- 福井市美術館（福井市）0776-333-2990
- 戸谷成雄展 森の壁の行方 6/6～7/27
- 愛知県美術館（名古屋）052-971-5511
- ヴィクトリアン・ヌード 19世紀英国のモラルと芸術 8/31まで
- 東京芸術大学美術館（東京都台東区）03-5685-7755
- 地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画 6/3～7/21
- 東京国立近代美術館（東京都千代田区）03-3324-1561

次回の展覧会

- 特集 茶道具と名物裂 （前田育徳会展示室）
- 特集 茶道美術名品展 （第2展示室）
- 特集 夏休み親子で楽しむ美術館 美術の動物園 （第6展示室）
- 七月十七日（木）～八月十七日（日）

六月の行事案内 《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
6/1（日）	CDコンサート	20世紀の名指揮者 カール・ベーム 3 モーツァルト 交響曲第35番「ハフナー」ほか（約60分） 演奏 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール
6/7（土）	土曜講座	戦後工芸の展開(3) 石川の昭和40年代 （前田武輝 学芸専門員）	講義室
6/8（日）	月例映画会	モナリザは語る その微笑みは永遠の謎か ダビンチの晩年（23分） ヴィーナスの誕生 エーゲ海の太陽（23分）	ホール
6/15（日）	月例映画会	中国古代青銅器の美 独自の生命力と怪奇な世界（23分）	ホール
6/21（土）	土曜講座	日本の金工14 鍛金 関谷四郎・奥山峰石（南 俊英 学芸第一課長）	講義室
6/22（日）	月例映画会	中国の陶磁 唐・宋・元・明の名品（23分）	ホール
6/28（土）	土曜講座	教科書美術館 中学・工芸編 （西ゆう子 学芸員）	講義室
6/29（日）	連続講座	美術館よもやま話 古九谷と石川県立美術館 講師 嶋崎 丞（当館館長）	講義室

六月の全館休館日はありませんが、二十三日（月）は前田育徳会展示室を閉室します。



干網

奥田憲三

大正8年(1919)~平成15年(2003)

昭和38年 1963

第6回新日展 特選

縦129.0 横161.0(cm)

作者は風景を、なかでも漁村や港をテーマとした作品を描き続けました。画業は六十年にも及びますので、むろんその間にスタイルの変遷はありますが、じつくりと対象を見すえ、褐色系を主調に描きあげる画面は、いずれも豊かな情感を湛えています。ずんと一本の太い芯がその画業を貫いているのです。

本作が描かれた当時は、画壇が抽象絵画の席卷を経た後で、写実系の画家はいずれも画面構成について強く意識した時期でした。ここでは網とそれを干す木組みを全面に据えて、線による構成が追求されています。前景の干網をダイナミックに描いて、その後方に港の景色を覗かせているのですが、その明暗の対比と見事に描き分けられた個々の質感の違いが、陽光に満ちた漁港の情景を生き生きと感ぜさせてくれます。

構成と情感、つまり知と情とが渾然一体となった作品といえましょう。昭和三十八年の第六回日展で特選を受賞しました。

奥田氏は大正八年松任市の生まれ。戦後まもなく画業をスタートさせ、石井柏亭、田崎広助に師事しました。一水会と日展に所属し、一水会優賞や二度の日展特選など、数々の賞を得ています。石川県の風景画の第一人者として北陸の一水会を率いて活躍しました。

またこうした活動に対し、平成二年に石川県文化功労賞、十一年に金沢市文化賞受賞などが贈られました。が、本年三月、永眠されました。八十三歳。

ミュージアムショップ通信

じめじめとした季節がやってきました。普段から雨の多い地域なのに洗濯物がますます乾きにくくていやですね。先頃終わった北野恒富展は、しつとりとした趣のある美人画で、慌たらしい日々を送っている私にとっては心の洗濯なら、もう何回しても良いと思うのですが。

さて、今月は図録を二冊紹介しましょう。一冊目は展覧会図録「北野恒富展」です。北野恒富は金沢出身の美人画家で、大阪画壇の中心的存在になりました。この図録には作品百十八点、資料を合わせれば計百二十九点が収録されています。部数にも限りがありますので、購入を希望される方はお早めにどうぞ。二冊目は「石川県の工芸 江戸時代から現代まで」です。当館で開催中の「戦後工芸の展開(3)石川の昭和40年代」にも展示されている工芸品も含めて、丁寧な解説付きで掲載されています。



「北野恒富展」
(定価2,000円)

れています。展覧会とあわせてこちらの方も自信を持ってお薦めします。



「石川県の工芸
江戸時代から現代
まで」
(定価2,000円)

休館日

今月はありません

石川県立美術館だより

第一二二六号 平成十五年六月一日発行

〒九二〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三三)七五八〇

FAX 〇七六(二二四)九五五〇